

2005年11月28日

京都大学未来フォーラム（第19回）を開催

今月も京都大学未来フォーラムが開催されました。第19回目となる今回は、梅原 猛氏に「日本文化とは何か」というテーマでご講演いただきました。梅原氏は、1948年に本学文学部哲学科をご卒業後、立命館大学教授、京都市立芸術大学学長、創設からの国際日本文化研究センター所長などを歴任され、現在は、同センター顧問を勤められるとともに、ものづくり大学総長に就任されておられます。また、『隠された十字架 法隆寺論』、『水底の歌 柿本人麿論』、『梅原猛の授業 仏教』など数々のご著書があり、その研究はこれらの著作を通じて世に"梅原日本学"と呼ばれています。

講演では、ソクラテス、デカルトなどの合理主義とニーチェやハイデガーなどの非合理主義という相反する二つの哲学書を耽読した大学時代の勉強についてや、西田幾多郎氏に影響を受け、西洋だけでなく東洋、特に仏教の思想を学び、その上に独自の"自分で考える哲学"を目指されたという哲学への姿勢、ご自身の哲学観について語られました。

また、笑いの研究から生まれた異なるジャンルの学者との交流や、"向こうから語りかけてきて"始めた8世紀の研究における法隆寺秘仏への疑問、建立の謎についての仮説のひらめきなどについて語られました。学生の皆さんに対しては、「学問は知識を詰め込まなくてはできない。しかし発見は知識にとらわれていては駄目だ。相反することを一人の人間ができる。それが創造だ。」とする湯川秀樹氏の言葉を紹介され、学問が孤独なものであり、学者は頭がいいだけでは駄目で勇気がいるとする持論など、多くのメッセージを送られました

